

3 発掘機関 下関市教育委員会

4 調査担当者 甲元真之、山内紀嗣、伊東照雄

5 遺跡の種類 遺物包含地

6 遺跡の年代 平安時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

土師器、須恵器、木器等を伴出している。

8 木簡の釈文・内容

木簡は二点発見されたが、断片であった。そのうち一点には墨書が認められるが判読は不可能である。

9 関係文献

下関市教育委員会 『長門国府』 一九七七年

(甲元真之、山内紀嗣、伊東照雄)



福岡・三宅廃寺

1 所在地 福岡市南区字コクフ一七〇〜二

2 調査期間 一九七七年(昭52)十一月〜一九七八年三月

3 発掘機関 福岡市教育委員会文化課

4 調査担当者 二宮忠司

5 遺跡の種類 寺院跡(三宅廃寺)

6 遺跡の年代 奈良時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は標高一・一mの沖積地に位置し、遺構として、瓦溜(雨落溝)とその北東部に東西二間×南北二間の総柱掘立柱建物、東に東西三間×南北四間の掘立柱建物、真北から約五度東にふれた溝とそれに直交する大小の溝二条と多数のピットを検出した。瓦溜から老司工式の軒丸・平瓦と丸・平瓦等が出土し、奈良前期に位置付けられる。溝は三宅廃寺に関連する外周溝と考えられる。廃寺の内容、配置、規模に関してはなお不明であるが、この雨落溝を北東隅とし西南・南北に延びる西側に位置している可能性が考えられる。二間×二間、三間×四間の掘立柱建物と溝は、奈良後期に位置付けられる。

木簡は三間×四間の掘立柱建物の外周をとりまく溝(南東隅)の合流する地点の底面より出土した。共伴遺物として瓦(平・丸瓦)、須

恵器、墨書土器（「寺」「堂」の銘）、土師器等が出土。南北溝の延長上に、黄銅製（佐波理製？）の匙・箸が検出されている。奈良後期に比定できる他の遺物として、ヘラ書土器（「東」「佛」の銘）、墨書土器（「造寺」「中」「口用」の銘）、櫛、曲物、石帯、青磁等が出土している。

8 木簡の釈文・内容

木簡については、その内容等は福岡県九州歴史資料館の倉住靖彦氏、写真は石丸洋氏にお願いした。木簡は三点検出したが、現存長一二・二cm、最大幅四・一cm、厚さ〇・七cmの一点のみが判読できる可能性がある。右方上半部に



の四字が認められるが、全体的に墨が薄く、その判読は困難である。この木簡の下端近くに二個の小孔があり、穿孔の状況からみて釘孔と考えられるが、その目的などは明らかでない。他の二点は墨書がみられる程度にすぎず、その上下関係さえも判定しにくい。

9 関係文献

二宮忠司 「三宅廃寺について」（『太宰府研究

二八』）

福岡市教育委員会 『三宅廃寺調査報告書』

（二宮忠司）

一九七八年

一九七九年